

# 南蛮菓子と戦国武将

—フロイスが信長にコンペイトウを贈って450年—

南蛮文化（料理・菓子） 研究家／昭和女子大学国際文化研究所 客員研究員

博士（学術） 荒尾 美代

「おでんの具・ガンモドキは、ポルトガルのお菓子だった!？」

1990年、私はカルチャードキュメンタリーの番組制作で、ポルトガルの首都リスボンを訪れた。フィリョーズという揚げ菓子和出会う。小麦粉と卵をベースにした穴の開いていないドーナツのようで、クリスマスに欠かせない伝統菓子のひとつだった。

関西では、ガンモドキのことを、「ひろろす」「ひろろろす」と呼ぶ。もともとは南蛮渡来であったお菓子のフィリョーズが、豆腐を材料にした惣菜の名として、名前に残ったのである。私は思った。日本のどこかにフィリョーズが残っていないか。かくれキリシタンの末裔がキリスト教と共に伝えられた菓子や料理を伝承しているのではないか。

## 五島列島の福江島にて

1991年、長崎県五島列島のかくれキリ

トウはポルトガル由来だ。ふるさとのポルトガルではコインブラという都市でコンペイトウはつくられている。また、大西洋のアソールズ諸島テルセイラ島でもコンペイトウは残っている。テルセイラ島で見かけた元祖コンペイトウは光沢のないマットな白色で、凸凹があった。日本のコンペイトウのように角はない。日本人が透明感のある色鮮やかなコンペイトウに進化させたことを知った。

## フロイスと信長

今年2019年は、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが、織田信長にコンペイトウを贈って450年になる。1569年、フロイスは信長が將軍足利義昭のために普請中の京都二条城に赴いた。信長と初めて謁見し、数本の蠟燭とフラスコ入りのコンペイトウを献上した。このことがフロイスの書簡に書かれている。同じ書簡のなかで「信長は酒を飲まない」とも記している。「酒より、甘いものがいい」と思っただろう。4年後の1573年、再びフロイスは信長にフラスコ入りのコンペイトウを贈っている。フロイスが巡察師のヴァリニャーノに宛てた1577年の書簡には、日本人が好むお菓子として、フラスコ入りのコンペイトウが挙げられていた。



ポルトガルのフィリョーズ

シタンの里・福江島に宮本金輔ご夫妻を訪ねた。奥様キヨさんが揚げ菓子を作ってくれました。ポルトガル菓子・フィリョーズにそっくりだった。キヨさんが「つけあげ」と呼んでいた菓子は、フィリョーズのように手のひらで薄く伸ばす形をしていた。この菓子は、キリシタンの教えを守る家でしか作らないという話も近所の人から聞いた。きつとフィリョーズの名残の菓子だ、と思った。

30年近くの月日が流れ、昨年12月、福江島を再訪した。お二人は91歳、お元気で私の名前も顔も覚えておられた。とても嬉しかった。福江島の「つけあげ」は健在で、キリシタンが作る菓子として伝承されていた。

## 南蛮菓子や料理の源流を訪ねて

フィリョーズをきっかけに、南蛮菓子や南蛮料理の原型の姿が気になり、その源流を求めて旅が続いた。みなさんに馴染みのあるコンペイ

私事だが、1995年、会社を辞めて大学院の門をたたいた。「調べることを学ぼう」 現在、南蛮菓子研究に没頭できるのは、番組制作を通じて知り合った夫のおかげである。

2014年、夫は病魔に倒れた。治療法がないと告げられた。その時真つ先に夫はノートに書き記した。「研究とか、本を書くとか、目一杯やれ」 自身のことよりも私のことをなによりも優先に考えていた。私は心に秘めていたプランを夫に伝えた。「信長がフロイスからコンペイトウをもらってちょうど450年の2019年、テレビ番組を作りたい」と。夫はベッドの上で企画の押さえるべきポイントを綴った。私は近刊『キリシタンの食文化(仮題)』(八坂書房)を上梓する。テレビ番組化は、まだ叶っていない。

私が歴史研究を始めてわかったことだが、先祖が信長の姪と結婚していた。南蛮菓子は、信長が私に与えてくれたテーマのように思えてくる。信長と夫、速い天国の二人に支えられながら、私は今を生きている。



テルセイラ島のコンペイトウ。ポルトガル語でコンフェイト